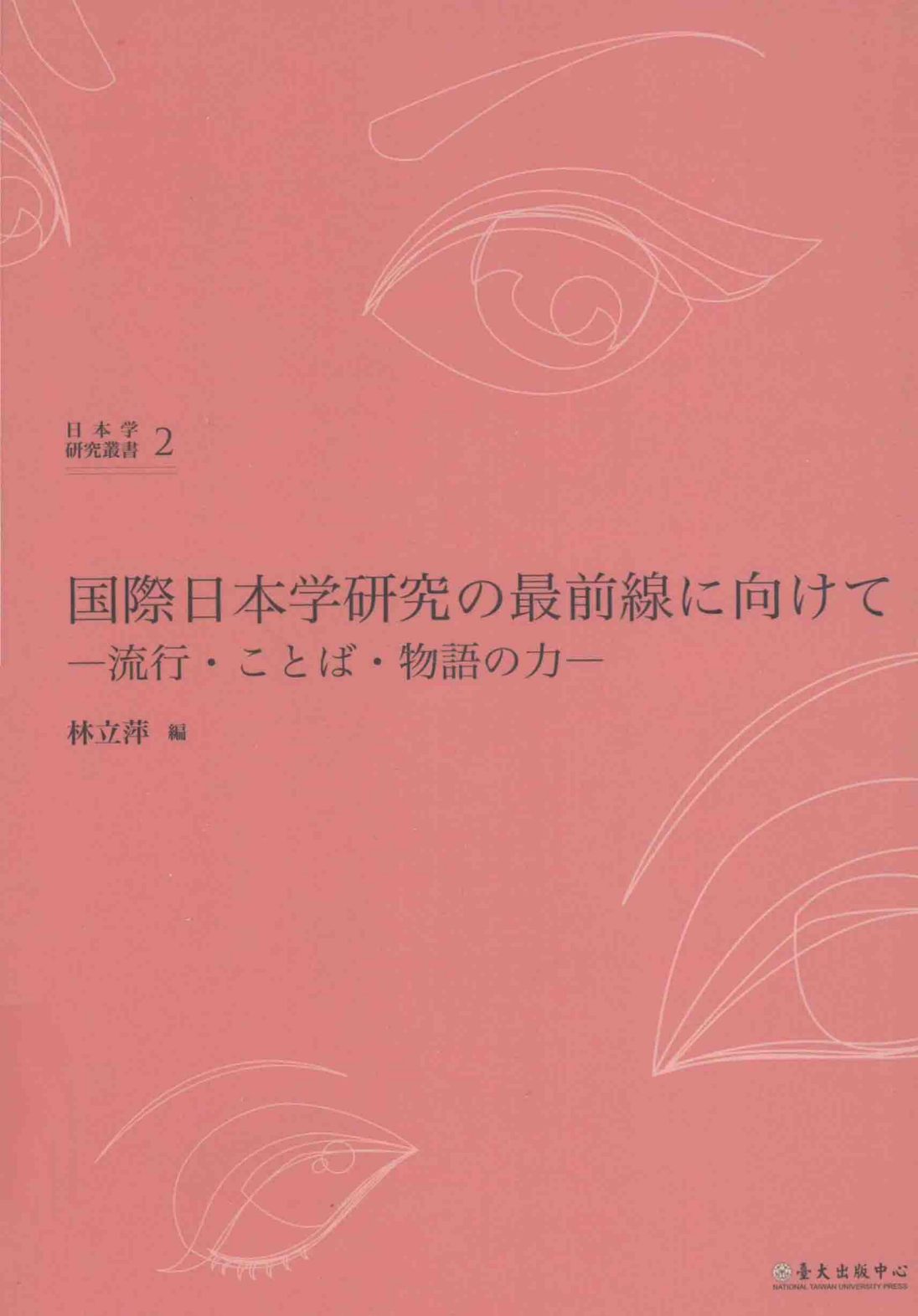


The background is a solid red color. Scattered across the cover are several abstract white line drawings of eyes. One large eye is in the upper right, another is in the lower left, and a third is on the right side, partially cut off. There are also some smaller, less distinct eye-like shapes in the top left and bottom right corners.

日本学 2  
研究叢書

# 国際日本学研究所の最前線に向けて — 流行・ことば・物語の力 —

林立萍 編

日本学研究叢書 2

# 国際日本学研究の最前線に向けて

— 流行・ことば・物語の力 —

林立萍 編

日本学研究叢書 2

国際日本学研究所の最前線に向けて—流行・ことば・物語の力—

---

2013 年 4 月第一刷発行

定価 NTD 600 元

編著者 林立萍

編集人 徐興慶

---

発行所 国立台湾大学出版中心 代表 項潔

10617 台北市羅斯福路四段 1 号 <http://www.press.ntu.edu.tw>

TEL: +886-2-2365-9286 FAX: +886-2-2363-6905

E-mail: [ntuprs@ntu.edu.tw](mailto:ntuprs@ntu.edu.tw)

10087 台北市思源街 18 号澄思樓一樓

TEL: +886-2-3366-3991~3 EXT. 18 FAX: +886-2-3366-9986

印刷 辰皓國際出版制作有限公司

---

ISBN: 978-986-03-6607-5

Printed in Taiwan

GPN: 1010200720

© National Taiwan University Press 2013

## 『日本学研究叢書』刊行に際して

台湾大学が戦後に旧台北帝国大学から受け継いだ日本研究に関する文献は、膨大かつ貴重なものであった。そして日本研究は長い歴史と伝統をもつ。この度、21世紀のグローバル化した新時代に日本学研究の潜在力を喚起するために、台湾大学人文社会高等研究院「日本、韓国研究プラットフォーム」の発足を契機に『日本学研究叢書』を出版する運びとなった。

さて、東アジアという枠組みで見渡すと、日本、中国、韓国などの国で展開した日本研究は、それぞれに特色のある内容を保っているが、台湾における日本研究は実績があるものの、とりわけ、人文と社会科学分野でクロスした対話は、必ずしも十分とは言えず、むしろ欠如しているという現状にあると言えよう。

そうした現状に照らして、本シリーズの刊行は、「人文と社会の対話」というキーワードを問題意識として、共通性と相異性の諸相を明らかにした研究成果をまとめ、次の四つの目的を遂行しようとするものである。

- (1) 人文社会科学分野における台湾の日本学研究を統合、強化すること。
- (2) 新たに「日本学研究」の学習環境を切り拓き、若手研究者の養成を深化させ、学際的、国際的な方向への発展

を期すること。

- (3) 日台両国の関連研究機構と緊密な連携を促進し、東アジアにおける日本学研究の構成を積極的に推進させ、国際共同研究の達成を目的とする。
- (4) 世界における日本研究の成果を生かし、台湾独自の特色ある日本学研究の発展を確立すること。

本書は台湾大学の「日本学研究叢書」の一冊として、東アジアの伝統文化および伝統的価値を深く掘り起こすだけでなく、国際日本学研究の最前線に立ち、流行・ことば・物語の力をめぐる新たなサブカルチャー研究を切り拓いた貴重な成果を見せ、新しい視点と方法の展開を示唆し、台湾における日本学研究の発展に大きく寄与するものであることは特筆されよう。

本シリーズは、国境を越え、学問的領域を越え、学術の国際化を図るために、台湾では初めて日本語による単行本の出版を試みたものである。今後も、さらに高度な研究成果が本叢書から創出されることを願っている。

2013 年 1 月 15 日

編集委員長

徐 興慶

# 目次

|          |      |   |
|----------|------|---|
| 序章 ..... | 林 立萍 | 1 |
|----------|------|---|

## I 流行・ことば・物語による国際日本学研究的の最前線

### 第一章 偽物の倫理

|                     |      |    |
|---------------------|------|----|
| —「鉄腕アトム」をめぐる— ..... | 宮本大人 | 13 |
|---------------------|------|----|

### 第二章 表徴としての〈かもめ〉の文学的意味

|                    |      |    |
|--------------------|------|----|
| —杜甫から中島みゆきへ— ..... | 太田 登 | 39 |
|--------------------|------|----|

## II 流行・トレンドの力

### 第三章 世界は、あなたたちのものまたわたしたちのもの

|                                         |      |    |
|-----------------------------------------|------|----|
| —『ノルウェイの森』から見た中国大陸の文学<br>生産体制の転換— ..... | 孫 軍悦 | 65 |
|-----------------------------------------|------|----|

### 第四章 「オタク」から「五徳厚（オドック）」へ：

|                                 |      |     |
|---------------------------------|------|-----|
| 韓国社会における日本オタク文化の受容をめぐる<br>..... | 金 孝眞 | 101 |
|---------------------------------|------|-----|

## III ことばの力

### 第五章 アニメ等の視覚資料の台湾における日本語教育

|                    |       |     |
|--------------------|-------|-----|
| に与える影響に対する考察 ..... | 謝豊地正枝 | 127 |
|--------------------|-------|-----|

### 第六章 アニメに見られる日本昔話の語彙 ... 林 立萍 155

#### IV 物語・ストーリーの力

|            |                            |     |
|------------|----------------------------|-----|
| 第七章        | 漱石の初期小説にみる「トレンディ女性」像       |     |
|            | —彼女らの運命を追いながら— .... 范 淑文   | 175 |
| 第八章        | 内面としての物語                   |     |
|            | —夏目漱石、村上春樹、そして「ONE PIECE」— |     |
|            | ..... 横路明夫                 | 203 |
| 跋文：        | 第一回日台アジア未来フォーラムを振り返って      |     |
|            | ..... 今西淳子                 | 219 |
| 索引         | .....                      | 223 |
| 執筆者略歴（執筆順） | .....                      | 227 |

## 序章

林 立萍

### 一、はじめに

漫画やアニメなど、日本のポップカルチャーは、近年、世界に浸透し、若者の間で高い人気を集めている。21世紀の初頭、ダグラス・マクレイ（Douglas McGray）氏によって提唱された「GNC」<sup>1</sup>が火種となり、「クールジャパンブーム」が起き、日本の映画、アニメ、ファッションといった「ソフトパワー」の形で世界から注目されるようになり、それにかかわる研究動向も注目されている。本書は、試みとしての意味から、現代日本のソフトパワーに焦点を当て、それに関する研究が、従来正統とされてきた日本学、日本研究のなかではどのように位置づけられるのか、どのように融合できるのか、それに関わる諸問題とどのように積極的に取り組むべきか、その可能性を探るのが狙いである。全体としては、目次が示すように、四つの部、計八章からの構成となっている。第I部は「流行・ことば・物語による国際日本学の最前線」と題

---

<sup>1</sup> Gross National Coolの略で、国の文化的な「かっこよさ」を測る指標であるという。国総クールや国民総魅力などと訳されている。

## 2 国際日本学研究の最前線に向けて

し、ポップカルチャーを日本学の研究対象とした理論的・実践的研究事例を提示し、国際日本学の最前線を追い、その課題と可能性を探る。第Ⅱ部から第Ⅳ部までは、それぞれ、「流行・トレンドの力」、「ことばの力」、「物語・ストーリーの力」をキーワードに、各二章で日本のポップカルチャーの受容問題、言語学習、物語研究に関する議題を取り上げて探ってみる<sup>2</sup>。

## 二、国際日本学における日本のソフトパワー

現代日本のソフトパワーは、日本研究を中心とした日本学、国際日本学において果たして課題として適切なものであろうか。また、どのような関わりがあるのか。第Ⅰ部は宮本大人氏と太田登氏の両氏の研究事例を通しその可能性を吟味する。

宮本大人氏は、ストーリー漫画の先駆者である手塚治虫（1928-89）の「鉄腕アトム」に即して、偽物が本物との関係において選び取りうる倫理の形を三段階に分けて提示し、それが、手塚のアメリカ、西洋に対する意識の移り変わり、或

---

<sup>2</sup> 本書は、「第一回日台アジア未来フォーラム：国際日本学研究の最前線に向けて―流行・ことば・物語の力―」を骨子にまとめたものである。フォーラムは、日本渥美国際交流財団 関口グローバル研究会（SGRA：セグラ）と台湾大学文学院、台湾大学日本語文学系・日本語文学研究所との共催で、2011年5月27日に、台湾大学文学院講演ホールにて二本の基調講演と三つのパネルに分かれた十二名の研究発表及びオープンフォーラムが行われた。本書刊行に際して、各報告者に対し、あらたに論文化した原稿を提出してもらった。したがって、口頭発表の時点から多少とも補訂された内容となっている。フォーラムでの発表ならびに本書への原稿依頼に快く応じてくださった方々に、心から感謝申し上げます。

いは、日本と西洋の関係のあり方の変容として捉えようとしている。つまり、それを日本、或いはアジアの文化と、近代化のモデルとされてきた西洋の文化の関係性の歴史と類比的なものとして読み解こうとする。一方、太田登氏は、中島みゆき、渡辺真知子など、第一次アニメブームが起こった1970年代にデビューした日本を代表する女性シンガーソングライターの作品にも重要なモチーフとして登場している〈かもめ〉を取り上げ、それがどのような日本の伝統的文化の表現様式をどのように受容し継承したのか、そのことの文学的意味について、表現論という視点から考察を行った。太田氏は、〈かもめ〉を文学的素材として捉え、杜甫の〈天地一沙鷗〉から中島みゆきの「かもめはかもめ」にいたる〈かもめ〉の〈表徴〉の意味を孤独、悲傷、漂泊、孤影と読み解いた。宮本氏の、日本のマンガ・アニメ文化もそれなりに日本の近代史の厚みを背負ってしまっているという示唆、そして、太田氏の、現代のシンガーソングライターの作品にも登場した〈かもめ〉に見られる表徴が、実は日本の伝統的文化表現様式とつながっており、時代や民族や国家を越えてまさに海を越える普遍的な意味を背負っているという見解、どちらも、ポップカルチャー研究が国際的な観点からの日本研究という枠組みの中で可能であるという貴重な観点のご提供であり、その先にある可能性を見据えた研究成果である。この点で、現代的なポップカルチャー研究がどのように伝統的な日本研究を融合させたか、新たな視点を切り拓くものとしてその意義と意味は大である。

### 三、日本のソフトパワーの魅力・影響力

日本の映画、アニメ、ファッションといった「ソフトパワー」は、前述したように、「クールジャパンブーム」と言われるほど世界から注目されている。それが世界各地に伝わった魅力、文化的影響力は、決して小さくない。そういう意味で、その受容のプロセスに対する関心は、国際日本学から日本のポップカルチャー研究を探る際、不可欠の視点である。このような観点から、第Ⅱ部は、中国と韓国における日本ポップカルチャーの受容プロセスを取り上げ、文化の力、文化の越境問題を考えてみる。孫軍悦女史は、村上春樹の『ノルウェイの森』の中国語版を中心に、それによる中国大陆における村上春樹文学の出版と受容プロセスを解き、中国の若者たちの日本の文学やポップカルチャー、そして、日本に対する認識や感情がいかに作り出されているのか、どのように変化しているのかについて検討を行った。孫氏によると、『ノルウェイの森』の中国語版は、「通俗文学」と「ベストセラー」との概念の変化<sup>3</sup>とともに、1980年代末の「エロティックな通俗小説」から1990年代末の「格調の高いベストセラー」へと移り変わった。そこから浮かび上がってくるのは、まさしく、かつて社会主義計画経済体制下に置かれた文学の生産、出版、流通システムが市場経済体制のなかで、イデオロギーの直接

---

<sup>3</sup> 孫氏によると、市場経済体制の確立に伴い、「通俗文学」は宣伝の効果を保障する文学の特徴から、経済的利益を保障する読者の趣味を表す概念に変わり、「ベストセラー」は宣伝の効果を測る指標から経済的利益を狙う目標へと変容したという。

な生産装置から、経済的利益を同時に保障するイデオロギー的な文化生産装置へと転換する過程であるという。2003 年以降、「村上春樹」という四文字が、中国ではブランドとなり、その新作も若者の「反日感情」により、次々とベストセラーとなった。村上春樹作品の受容プロセスから読み取られる文学作品を受け入れた若者の考え方の変容は、文学と市場とイデオロギーとの複雑な関係の反映でもある。一方、金孝眞女史は、1990 年代以降にフォーカスし、大衆文化、特に漫画・アニメ・ゲームなどのオタク文化が現代韓国社会でどのように受け入れられているのか、またその受け入れ方にどのような変化が起きているのか、日本のポップカルチャー文化の受容、変容、越境などについて検討を行った。金氏は、1990 年代後半を基点に、韓国のオタク文化のファンの中で世代が分かると指摘した。金氏によると、90 年代以前を第一世代、90 年代を第二世代、2000 年代以降を第三世代と呼ぶとすると、韓国における「オタク」は第二世代に当たり、「新たにファンになった人たち（五徳厚含む）」は第三世代に当たるとし、そして第一世代や第二世代の間ではコミュニティの有無が大きな違いをもたらしたにも関わらず、少数の文化ということには変わりはないが、第二世代や第三世代の間には韓国社会の急激な変化とともに、ただの日本好きとしてのオタクと純粋なオタクのようなものを区別したいという「イルパ」と「五徳厚」の分化現象が、日本から切り離して楽しむ、新しいファンの登場を象徴していると物語るという。このように、ある文化が国境を越え、どのように受け入れられてい

くのか、どんな変化が起こるのか、そのメカニズムの解明は、容易なことではないが、その地域の地理、歴史、社会、政治、経済事情などが深く関わっていることを改めて実感させてくれる。

#### 四、日本のソフトパワーの教育力・文化力

人間は混沌とした世界をことばによって切り取り、外界の事象を認識し把握している。そして、その切り取り方は文化によって異なる。ことばは、文化である。その一方、文化もことばによって成り立ち、伝承される。第Ⅲ部は、ことばと文化を視野に入れ、言語教育や外国語教育におけるアニメの言語文化をめぐる諸問題を扱う。謝豊地正枝女史は、台湾大学の日本語学科の学生に対するアンケート調査からアニメが大学生にも好まれているという一端を浮き彫りにした。謝豊地氏のご指摘のように、アニメを講義の一環に組み込むと、確かに、日本文化への理解や聴解力の向上に役立つという意義はあるものの、過剰な擬音語と擬態語の使用及び簡略化される表現傾向は、丁寧な、正しい日本語の学習効果があまり期待できないという点も安易に見過ごすことができないのである。それに対して、筆者は、日本昔話は特定の文学者や詩人によるものではなく、民衆の日常生活の中から生まれ日本文化があふれているという点に注目し、ビデオアニメを媒介とし、日本語教育関係の語彙表との比較と意味分類を手がかりにし日本昔話の帯びている語彙性格、文化側面を探り、日

本語教育との接点について考察を行った。結果としては、日本昔話は「基本的な語彙」の性格が強く、ある程度の初級能力を備えていたら、容易く聞いたり読んだりすることができるということがわかった。そのうち、「動物、植物」項目を表す語が特に豊富で、「自然現象」を特徴のある意味分野として指摘できる要因と結論付けている点が特に注目される。

日本のアニメは、教材として活用する際に、見逃しやすい落とし穴が存在しているかもしれないが、『日本はアニメで再興する』<sup>4</sup>（櫻井孝昌、2010年）にも示唆されているように、世界で愛され、想像を超えて世界に広がっており、世界の若者の生き方に与える影響はかなり普遍的なものになっている。アニメを見たり聞いたりするうちに、日本文化の理解や日本語学習の手助けになるだけでなく、それに対する興味・関心が日本語学習者の学習動機にも影響している。この意味で、日本語教育におけるアニメの扱い方にはことさら慎重にならなければならないと同時に、それに関わる研究も国際日本学における日本のポップカルチャー研究を考える際に、重要な課題である。

---

<sup>4</sup> 本書は、日本のポップカルチャー研究家、外務省アニメ文化外交に関する有識者会議委員櫻井孝昌氏によって書かれ、16カ国延べ38都市で、アニメ・マンガの人気を現地取材し「日本を愛する若者たち」の真実を伝える記録であり、提言の書でもある。2010年4月にアスキー新書として出版された。

## 五、日本のソフトパワーの文学創作力

第Ⅳ部は、物語・ストーリーの力をキーワードに、夏目漱石、村上春樹、「ONE PIECE」を取り上げ、物語における女性像、内面性について考え、学問や芸術などといったハイカルチャーとポップカルチャーとの融合領域を切り拓くことを目指す。范淑文女史は、漱石の初期小説から明治社会を生きようとした新しい女性——「トレンドィ女性」像を浮き彫りに、漱石の女性観に迫ることを試みようとしている。范氏の分析によると、漱石の初期作品に登場している女性たちのキャラクターには、ハイクラスで、知的で、個性があり、洒落ているというプラスのイメージに対して良縁と職業の匂いが薄いという望ましくないイメージをも合わせ持っている。つまり、西洋的な教養を身につけ知的な「トレンドィ女性」に憧れながら、女性の自立や恋愛結婚による伝統からの脱出が進み、父権社会が崩壊することも怖れていた漱石の女性観の側面を范氏は提示した。それに対し、横路明夫氏は、小説における人間の内面をいかに語り出すかを課題とし、夏目漱石、村上春樹、「ONE PIECE」を取り上げ、物語の構造と人間の内面について考察を行った。横路氏は、ストーリーの二重化、つまり、「物語に現前する登場人物の心境の内実を、もう一つの独立したストーリーによって語り出す」という方法が、夏目漱石、村上春樹、「ONE PIECE」に限るものではなく、脈々と受け継がれ、時代を超え、広範な読者を生み得ていることを主張した。

このように、サブカルチャーはこれまでの伝統文学の要素を用いながら新たに切り拓かれた領域の文学創作と看做すこともでき、従来の文学研究方法を活かすことができるとともに、純文学とのクロス研究も可能であることが言えよう。

## 六、おわりに

日本の外務省は、近年世界的に若者の間で人気の高いアニメ、マンガ等のポップカルチャーも、日本に対するイメージや親近感を高めるのに大きく寄与すると考えられるため、国際漫画賞、アニメ文化大使事業、ポップカルチャー発信使（カワイイ大使）委嘱などの事業を実施し、「ポップカルチャー」をテーマとした文化外交の一環として積極的に活用しようとしている。2006年に、さらに、日本ポップカルチャー専門部会を設置し、「ポップカルチャーへの関心をどのように日本への関心に高めるか」及び「ポップカルチャーを推進している産業界に対して外務省がどのような協力を行うべきか」につき、何度も検討を重ねてきた。また、経済産業省は、2010年に「クール・ジャパン室」を設置し、「クール・ジャパン戦略」として、日本のポップカルチャー方面を中心に文化産業の海外展開支援、輸出の拡大や人材育成、知的財産の保護などを図る官民一体の事業を展開しており、文化・産業の世界進出促進、国内外への発信などの政策を企画立案および推進している。一方、日本の文化庁も漫画、アニメ、ゲームなどを、新たに「メディア芸術」と名づけ、従来の芸

術振興とは別の枠組みで振興しようとしているという。このように、ポップカルチャー、特に日本の漫画やアニメなどに代表される大衆文化は、かつては、娯楽的で、大衆向けに大量生産される俗的なものとされがちであったが、そのものの意義を積極的に評価する動きが時代とともに活発になりつつあると見受けられる。

グローバル化が急速に進む中で、現代日本のソフトパワーに関する研究は、それが正統とされる日本学、日本研究においてどのように位置づけられるのか、どのように融合できるのか、こういった課題に関わる研究課題はまだまだ多々あると思うが、本書は、日本の言葉や物語・ストーリーといった視点から従来の正統的な語学・文学をめぐる斬新な方法論の実践を視野に入れ、新たに注目された流行文化にも焦点を当て、21世紀にふさわしい国際日本学研究の最前線に向け、新たな展開についての議論を深め、グローバルに研究領域を広げた国際日本学研究に寄与するとともに、まだ学問として成り立っていないサブカルチャー研究においても、多角的な視野を提供できればと願う。